

『Japan To-Day (現時の日本)』 (5)

おやさと研究所准教授
尾上 貴行 Takayuki Onoue

ここまで、1910年にロンドンで開催された日英博覧会を契機として、望月小太郎が外国人に日本を紹介するために刊行した英文書籍『Japan To-Day (現時の日本)』についてみてきた。同書の内容は日本の歴史と現状の概説であるが、そのなかで、立教からわずか70数年の天理教が特筆すべき宗教の一つとして紹介されている点はきわめて興味深い。望月が天理教を取り上げた経緯は明らかではないものの、同書への掲載は当時の日本社会における天理教の存在感を示す一つの証左であったといえよう。

この書籍は天理教教会本部に寄贈されている。『みちのとも』明治43年(1910)7月5日号掲載の「英文『現時の日本』と天理教」(77～78頁)でそのことが紹介されている。当時は船場教会(現・船場大教会)の布教師がロンドンへ渡航し、布教活動を行っていた時期でもあり、同号にはそのロンドン布教に関する記事が掲載されていた。そのため、「英文『現時の日本』と天理教」記事は、ロンドン布教に加えて「モーター本教を世界に紹介された嬉しい事実を読者諸君の前に報道するの光栄を有する」と書き起こされている。

同記事ではまず、ロンドンで開催されている日英博覧会が日本政府と英国の博覧会会社の共催であること、そしてこの機会に前衆議院議員・望月小太郎が経営する東京の英文通信社が、日本の現状を広く世界に紹介する目的で、多額の資本と学識を投入して『Japan To-Day (現時の日本)』を編集・刊行したことを紹介している。さらに、同書が「売価一冊金拾五圓」で販売されていることも伝えている。

続いて、寄贈された同書の装丁について、次のように記している。

先づ驚かされたのは其表紙の立派な事と非常に厚みと重みのある事である。表紙は京都西陣製の織物で古代式に日本の景色が織出されて、大通を太い絹の組紐で綴っている紙数は全巻で八百余頁だが、極く上等の西洋式が用ひてあるから、厚み約四寸位はあらうと思はれる。大きな鉄瓶を下げた時程の重みがあって二歳や三歳の子にはとても持つこない。

さらに本文についても、

巻を開くと非常に鮮明な英文の間々に極めて精巧な写真版が無数にいれてあるから、文字の読めない人でも、此写真だけ見て置けば、日本の概要だけは解る。記事の順序は最初に日本の歴史の大体が、それから物産、工業、官制等、台湾、樺太、満州の事迄互細流暢な英語ですらすらと書き下ろしている。

と紹介し、豊富な写真と平易な英文によって、日本の概要を外国人に理解させる構成になっていると評価している。

一方で、日本の文芸に関する記述が見当たらないことに物足りなさを示しつつも、宗教については比較的詳しく扱われていると指摘。仏教では高野山(真言宗)や総持寺(曹洞宗)をはじめとする名刹が紹介され、神道では伊勢の大廟とともに「我が天理教」が掲載されていると述べている。そして、天理教に関する記述について、次のように紹介している。

同書六百九十九頁を披くと Tenrikyo 天理教と云ふ見出しがあつて初めに総論めいた事を少しく述べそれから教祖の御履歴を書き、九十歳の長寿を保つて御帰幽になったが、その後信者は非常に増加した。今日迄には種々の迫害もあつたけれども、政府は遂に一昨年十一月二十七日独立の宗教たる事を認可したと云ふ事から、天理唱歌の幾部分及び御守護、八埃等の事などが述べてある。それで写真版は祭服を召して御座る管長公を最初に本部、中学校、教祖御墓地、加ふるに土持ちの處迄載せてあるから先づまづ此記事によつて本教の大要が知られる訳である。(写真参照。上の教会本部、下の土持ちのきしん。)



さらにこの記事は、『Japan To-Day (現時の日本)』の価値について、「大隈、山縣、桂其他朝野の名士から寄せられた賞賛状によつても明らかに知る事が出来る」と述べている。そのうえで、同書は10万部印刷され、そのうち3,000部は諸外国の国王や大統領などの要人へ寄贈され、残部は主として日英博覧会の来場者に頒布される予定であると紹介。そして最後に、「かくして日本の事情が諸外国に紹介せらるるのは嬉しいが、我等はそれと同時に本教の幾分が、廣く萬国の人々に知らるるのかと思ふと無限の喜びを感じずには居られない。」と結び、同書を通じて天理教が世界へ紹介されることへの期待と喜びを表明している。

『Japan To-Day (現時の日本)』でのこの天理教紹介については、後年、大久保昭教『外国人の見た天理教』(天理教道友社、1973年)でも取り上げられている。大久保は、明治42年(1909)2月に『大阪朝日新聞』が連載した「天理教独立奉告祭」の記事はそれまで新聞や雑誌でさまざまな批判や攻撃を受けてきた天理教にとって画期的な意義をもつものであった、と分析している。また、この独立奉告祭を日本国内で刊行される英語をはじめとする外国語出版物において天理教が取り上げられるようになった契機として位置づけ、その具体例の一つとして翌年刊行の『Japan To-Day (現時の日本)』を挙げている。そして、「明治43年ロンドンの日英博覧会記念出版物『現代日本』の中で紹介された記事は、きわめて大きい影響を与えたと申せよう」(137頁)と述べているのである。